

第4回 国立国語研究所国際シンポジウム

第3専門部会 「国語教育と日本語教育の統合的研究」

開会の辞

柳澤 それでは、第3専門部会を始めたいと思います。国立国語研究所の日本語教育センターの柳沢と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日はこれからの日本の義務教育、小学校、中学校、高校の国語教育・日本語教育について、各部門の先生方とお話し合いができればと思っております。この後は皆様のお手元にあります資料の最初に目次がありますが、この目次に従いまして行っていきたいと思います。それでは、問題提起に移らせていただきます。

問題提起

教育チームの研究課題

甲斐ム それでは、この第3専門部会「国語教育と日本語教育の統合的研究」につきまして、時間を少々頂戴して、この専門部会の趣旨説明と、これまでの取り組みについて簡単に説明をさせていただきますと同時に、本日の問題提起を行いたいと思います。

[1 新プロ・研究班4・教育チームの概要]

国立国語研究所の水谷修所長が「国際社会における日本語についての総合的研究」というテーマで、文部省の新プログラムという大型の科学研究費補助金を頂いて、今年度で3年目になります。その新プロ「日本語」の内容につきましては、本日さし上げている「新プロ・ニュースレター」創刊号に詳しく記されていますので、後をご覧ください。

新プロ「日本語」には4つの研究班があります。その中の研究班4は「情報発信のための言語資源の整備に関する研究」を目的として結成されております。日本の研究・情報を外国に伝えるにはいくつもの障害があります。それを3つに整理してみます。

- (1) 外国人で日本語を理解する人が少ない、層が限られている問題。
- (2) 日本人の言語能力が読解向きに偏っていて、話しことば向きになっていない問題。
- (3) 日本人の話しことば能力が発信型になっていない問題。

研究班4では、そういう3つの問題にどのように取り組み、解決していくかを考えようとしているわけです。

その研究班4は、更に4つのチームに分かれています。私どもが「教育チーム」と呼んでいるチ

ームは、その中の1つとして、「日本人及び外国人に対する言語教育の統合的研究」というテーマを立てて、次の2種5類の目的・意図を追求しようとしております。

(1) **学校教育で行われている言語教育の改善**

- 学校教育で行われている国語教育
- 学校教育で行われている日本語教育
- 学校教育で行われている外国語教育

(2) **学校の各教科で使用されていることばの改善**

- 他教科の教科書の言語表現
- 授業過程や教師のことばの違いなど

つまり、私どもは、学校教育に焦点を当てて、国語教育、日本語教育、外国語教育の統合的な研究に取り組んで、その統合の課題を解決したいと考えているのであります。これまでの国語教育研究では、言語能力の育成の問題を国語という教科の中だけで考えようとする狭い態度が見られました。しかし、それだけでは決して十分とは言えません。国語という教科は、学校教育を基礎面から支える役割を持っております。また、他教科を含めて学校教育を全体として統括する役割も有しています。そういうわけで、目を他教科に広げなければならない、他教科の教科書の問題、あるいは他教科で行っている話し合いなど授業過程の問題、そういうところにまで目を向けなければならない、ということに私どもは思い至りまして、そうした学校教育全体の問題について具体的に検討を加えようとしているのであります。

〔 2 協力者・分担者 〕

次に、協力者のことについて一言説明しておきます。本日さし上げている資料には、協力者・分担者としては、文部省に届けている研究者だけを掲げておりますが、他に文部省、文化庁の各調査官がいます。本日からしている初等中等教育局の小森茂さん、文化庁国語課の氏原基余司さん、野村敏夫さん、本日出席できなかった初等中等教育局の相澤秀夫さん、田中孝一さんのお名前が挙がっておりませんが、実際はメンバーに入っていたいただいているのです。公の形では省かざるを得ないということでこの名簿から除いてあります。その点をご了承ください。

〔 3 教育チームの調査研究計画案 〕

次に、教育チームの5年間の研究計画案は、次に提示しておりますように、全3次案になっております。

* 第1次調査研究「知識・情報の収集期」平成6～7年度

日本の言語教育のあり方を探るために、学校教育における国語教育、帰国子女教育、日系外国人子弟への日本語教育、外国語教育、外国人学校における日本語教育などに関する専門家の見解を聴取する機会をもち、協力者の検討・考察を積み重ねる。

- (1) 座談会、ヒアリング、インタビュー等の機会をもつ。
- (2) 試案として、全国の識者を対象とした意識調査を行う。
- (3) 帰国子女、日系外国人の子弟を多く受け入れている学校の実態調査を行う。

***第2次調査研究「調査探究の実行期」平成8～9年度**

第1次の調査研究の成果をふまえて、本格的な調査研究に取り組む。その内容は、次に提示するとおりである。

- (1) 日本の音声言語教育の振興を考える。
- (2) 他教科の教科書の言語表現を取り上げる。
- (3) 帰国子女、外国人子女への日本語教育を考える。
- (4) 全国の各領域・分野の識者を対象とした本格的な意識調査を行う。

***第3次調査研究「調査研究のまとめ期」平成10年度**

最終報告書を刊行するために力を入れる。最終報告書には、これまでの研究内容を整理統合させて、日本の義務教育期の言語教育についての提言を行う。

〔4 これまでの調査研究の実際〕

この2年間に合計12回の話し合いを開催してきました。それは、次のとおりです。

(1) 「これからの国語教育を考える」(分担者・協力者の話し合い)

これからの5年間の調査研究に取り組む前に、国語教育にどのような改善すべき問題点があるか、について、国語教育史の面、日本語教育の面、外国語教育の面、日本の社会人の言語生活面、というように多様な側面からの検討を行った。

(2) 「日本固有の言語文化を大切にす」(荒木博之・宮崎公立大学教授を迎えて)

荒木博之氏は、英語教育の専門家の立場から、日本の伝統文化を大切にすべきこと、英語表現と日本語表現の相容れない部分に目を向けるべきことなどを指摘する。他に、日本に導入され始めたイマージョン・プログラムについて具体的に説明を行う。

(3) 「学校教育を見回した国語教育のあり方」(辻村哲夫・文部省審議官を迎えて)

辻村哲夫氏は、国語教育を学校教育全体に位置づけてとらえるべきこと、学校では国語教科書に振り回されているが、教科書でなく学習指導要領の徹底を重視すべきことなどを強調する。そして、文部省の学力テストでも音声言語教育の調査に踏み切ったことなどを具体的に説明する。

(4) 「音声言語教育を重視する国語教科書作成」(柴田武・東京大学名誉教授を迎えて)

柴田武氏は、次のような説明を行った。現行の国語教科書は文字言語教育中心に作成されている。日本人の音声言語能力の育成を考える必要があるが、そのためには、教科書も音声言語教育に十分配慮を加えた編集を行う必要がある。

(5) 「言語技術を習得させる国語教育へ」(木下是雄・学習院大学名誉教授を迎えて)

木下是雄氏は、「言語技術」という用語が本意でないところで一人歩きしてしまったが、言語で理解・表現する上での根本的な能力の育成を考えている、また情意に傾いた国語教育から論理を大切にした国語教育への改革を考えている、と説明する。

(6) 「言語の科学的な学習方法の開発」(中島和子・トロント大学教授を迎えて)

中島和子氏は、カナダで普及しているイマージョン・プログラムについて説明をした上で、日本の国語教育がもっと科学的にきめ細かく行われるべきことを指摘する。そのためには、学習方法の開拓などに力を入れるべきことを具体的に説明する。

(7) 「日本語教育から見た国語教育」(ネウストブニー・大阪大学教授を迎えて)

ネウストブニー氏は、学習者を大切にする日本語教育の立場から、日本の国語教育の不合理な側面に光を当てて、言語能力の育成における問題点を指摘し、音声言語教育にもっと力を入れるべきことを述べる。

(8) 「日系外国人子弟のための日本語教育」(渡辺章子・サンパウロ大学教授を迎えて)

渡辺章子氏は、ブラジルの小学校のポルトガル語の教育の現状と問題点について具体的に説明する。また、日系ブラジル人の生き方、三世、四世の日本語に対する意識などについても説明を行う。今回は、本人の都合に合わせたので、研究会でなく対談形式を採った。渡辺章子氏から日本人であることに誇りを抱く生き方を知る。

(9) 「これからの国語教育を考える」(分担者・協力者による話し合い)

音声言語教育の振興、他教科の教科書の語句・表現の検討、帰国子女等のための日本語教育のあり方の3点に分けて、それぞれの現状と問題点について話し合う。

(10) 「他教科の教科書の語句・表現」(安西迪夫・十文字女子大学教授を迎えて)

安西迪夫氏は、かつて上越教育大学で取り組んでいた課題研究「理科、社会科、算数科の教科書の語彙や表現上の特徴」について説明する。特に、国語教科書との語句上の違いの析出に力を入れた説明があった。

(11) 「理科の教科書の用語・表現」(村井護晏・大分大学教授を迎えて)

村井護晏氏は、理科の教育研究、理科の教科書の語彙・表現の分析に力を入れてきている。同じことばが理科と国語科で違った意味になることがあることなどを学んだ。

(12) 「国際シンポジウムに向けて」(分担者・協力者による話し合い)

近く迫った国際シンポジウム・第三専門部会「国語教育と日本語教育の統合的研究」に対処するために、3つのセッションの内容等について話し合いを行った。

〔5 報告書「国語教育の改善に向かって」の刊行〕

私どもは、上記のように研究会を12回開催してきました。その第1回から第8回までの内容につきましては、この7月に刊行した教育チーム研究報告書『国語教育の改善に向かって』(A4・200ページ)にまとめてあります。既にお手元にお送りしておりますので、お読みいただいているかと思いますが、大まかな目次だけを申しておきますと、次の構成になっております。

序章

第1部 これからの国語教育を考える

第2部 識者に聞く国語教育のあり方

第3部 国語教育改善の取り組み

〔6 これまでに導きだした問題点〕

私どもは、既にご紹介しましたように、研究協力者の各調査研究の話し合いを集積する、各界の識者の考え方を確かめる、という2種の活動から、11項目にのぼる問題点を導きだしてきました。それらは、次に掲げるとおりです。

- (1) 国語の教師がどんなにがんばっても、その力が他教科に及ばないことがある。それはその

がんばりが国語科という一つの教科の内にとどまっているという問題があるからである。

- (2) 算数科や社会科などの教科書には、日本語表現としての問題が少なくない。それは、
不自然な言い回し
学年配当を無視した漢字の使用
などというように、日本語・国語の約束ごとと違うことが、他教科で目立つかたちで行われているからである。全教科で筋が通っていないと、学習者は辛いと感じるのではないか。
- (3) 帰国子女などのためにも、常用漢字は、「手で覚えろ」でなくて、その習得の効率的な方法を開発する必要がある。そして、それによって生み出される時間で話す能力なども育てることができるのではないか。
- (4) 国語科では、文学教育をはじめとして美的な機能の育成に力が注がれすぎている。国語科で推進すべき機能としては、情報機能、対人関係機能、美的な機能、の3つであって、それらは均等に育成すべきである。日本語を世界中の1つの言語として見るという観点が国語科教育の中に育たなければならない。
- (5) 学習指導要領では、(4)で取り上げた美的な機能(鑑賞的な機能)に相当するものは全事項中の1割にも満たない。が、教育の実際の間では突出しているように思われる。指導のための材料を提供している検定教科書の教材に原因があるように思う。何が教材なのか、何を指導すべきなのかを明確にすべきである。
- (6) イギリスでは、情報機能の教育が3分の1に近いものを占めている。パソコンなどはむしろ低学年で使わせている。文字が書けないのであれば機械を使って記述させてみようと考えている。話は相手に通じればよいという段階を設けて、次の段階で美を追求することになる。日本では美しくというレベルと混同している。
- (7) いままで、国語教育あるいは国語科教育が研究対象としたのは、国語科という教科内容における教育作用であった。学校教育全体に拡げた調査研究が必要である。言語能力の育成という観点を立てて学校教育、教科教育全体をとらえる必要がある。
- (8) ディベートが盛んになってきたが、日本人の気質や文化的背景を前提にしたコミュニケーションのあり方を考える必要がある。
- (9) 地域で日常的に話す音声言語教育を大切にしたい。それは、自分が日常使用している言語を意識する教育を行うということである。
- (10) 例えば仮定表現でも教科によって違いが出ている。それは教科による認識や概念形成の違いによるのではない。
- (11) 「国語・国語科・国語教育」を「日本語・日本語科・日本語教育」に改めたいという意見もあるが、その呼称の問題は慎重に考えるようにしたい。

以上の11項目ですが、これらは私どもがたどり着いた結論ということではなく、これから解決していくべき問題点です。結局のところ国語教育というのは国語科の授業を考えているだけではだめで、他教科のことも考えないといけないうし、帰国子女や外国人子女などを、例えば、離れを用意してその中に隔離したかたちで世話をするというのではなくて、普通の児童や生徒の中に入れて考えなければならない、そのためには国語科教育の質を改めなければならない、というところへやっと思いついているところでもあります。

〔 7 実施できていない検討事項 〕

ここで、最初に計画したことで遂行できていない検討事項について申し上げます。

- (1) 全国の識者へのアンケートの実施
- (2) 財界・政界の識者を講師に招く
- (3) 日本にある国際学校の言語教育専門の方を招く

これら3項目が実施できていないものです。(1)は、アンケートの文案作成の段階で、文部省初中局に迷惑がかかるのではないかという強い意見が出て、全国の識者を対象としたアンケートを断念せざるをえないところに追い込まれております。(2)は、政界の方はたいへんお忙しく、財界の方は何人かに接触してみましたが、どの方も戻込みをして適任者が求められないという結果に至っています。

最後の(3)は、日本語の分かる適任者が求めがたいということです。依頼段階で、日本語が分からなくてもよいかという問い合わせが2、3ありましたが、日本の言語教育の改善を主題としていることから、日本語についての理解のある方がよいという立場を取ってきております。なお、これら3つの問題点につきましては、平成8年度以降も継続して取り組みたいと考えております。

〔 8 平成9年度以降の取り組み 〕

さて、来年度以降の予定ですが、次のような計画で進めようとしております。

- (1) 考察の領域・対象を拡げて、学校教育全体をとらえるようにすること。
これまでの国語教育の研究では、教科としての国語科の内容だけを問題にしてきた。それでは狭すぎる。社会科や理科などについて、教科書類で使用されている語彙、表現、授業における話合い、そして、そこで駆使されている話型などについてきちんと調査検討を加えなければならない。
各教科の教科書の本文の調査を行う。語彙、表現、構成などの問題を検討する。
各教科の自覚的な研究者からことばに関する話を聞く。
ビデオで各教科の授業記録を撮影して、それを言語的に分析する。
- (2) 国語教育についての経済界、政界などの方々の見解を聞く(昨年度からの継続)
秋山富一(住友商事社長 『肩書でお辞儀の深さを変えるな』ごま書房)
鳩山邦夫(元文部大臣で音声言語教育の推進を強調)
- (3) 帰国子女担当の教師に、国語教育に関する考え方についてのアンケートをとる。
アンケート内容としては、帰国子女を担当した結果、どういうことに気づいたか、現状をどう変更すべきか、などを中心とする。
- (4) 国語教育と日本語教育の各研究者が見解のすり合わせを行う。
- (5) 本日の、この第3専門部会の記録を主軸にすえた報告書『これからの国語教育を考える』(仮題 A4・150ページ)を刊行する。

〔 9 第3専門部会の概要 〕

本日、これから進めていきます第3専門部会の内容ですが、これにつきましては、司会者のほう

から改めて問題提起が出されるわけですが、主催者側として、3つの柱について簡単に説明しておきます。

第1のセッションは「『言語能力の育成』から見た国語科と他教科」というテーマを立てています。社会科や算数や理科の教科書を見ておきますと、私どもが国語の教科書だけで問題にしてきたこととは違う問題点がいろいろとあることが分かります。そこで言語能力の育成という面で見るとそれぞれの教科書の語句や表現、あるいはその授業をどのように捉えると良いか、そういった点に目を向けていくべきだと考えたのです。とりわけ文部省では「総合」という考え方を提案しようとしています。それで、「総合単元」というものを考えていく場合に社会科や理科の内容を国語科の中で「総合単元」として取り入れていくのではなく、逆に社会科や理科の中でことばをどのように考えるかということをお話していただければと思います。

第2のセッションは、「帰国子女と外国人子弟の言語教育」です。以前新聞には外国人の子弟が入ってきた時に特殊学校の中に入れたということで問題になったことがあります。今でも別の形で学級を構成して一定の日本語能力がついた時に、つまり日本在住子女とあまり変わらない国語能力が育ったと認定された時点で一般学級へ編入させるという扱いがありますが、これでは普通学級に入るための予備学級の扱いでしかありません。そういう学校教育を改めなければならないのと同様に、国語教育も質的に変わっていかねばなりません。そういうことで今日は日本語教育の専門の方々に沢山おいていただいておりますので、国語教育を質的にどのように変えていったら良いかということについてお話しいただこうと思います。

第3のセッションは「音声言語教育の振興」というテーマを立てています。これからの国語教育をどのように考えていくべきか、ということを中心に据えて音声言語教育について考えようということです。昨年の国立国語研究所の第3回国際シンポジウムは「世界の言語教育、日本の国語教育」というテーマで開催しました。そこでも音声言語教育を推進する上でどうすれば良いかということをお話していただきました。本日の第3セッションは、それを受けた展開という意味を持っております。

そういうことで今日は時間的にだいぶ長くなりますが、どうぞよろしく申し上げます。以上で最初の問題提起及び趣旨説明を終わらせていただきます。

柳澤 それでは第1のセッションとして「『言語能力の育成』から見た国語科と他教科」を始めます。後は司会の寺井さん・高木さんをお願いいたします。